

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量(上) 過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
抗白癬菌成分	エキサラミド 医療用医薬品としてなし																	
塩酸アモロルフィン	ベキロンクリーム	抗真菌作用・塩酸アモロルフィンは皮膚糸状菌(Trichophyton属、Microsporum属、Epidermophyton属)、酵母類(Candida属)、黒色真菌(Fonsecaea compactum等)及び癜風菌(Malassezia furfur)に強い抗真菌作用を有した。作用機序塩酸アモロルフィンの作用機序は、エルゴステロール生合成経路上の2つの段階を選択的に阻害することにより、細胞膜の構造、機能を障害し抗真菌活性が発現される。					0.1～5%未満(局所の刺激感、接触皮膚炎、発赤、そう痒、紅斑)0.1%未満(癢痛、疼痛)			本剤成分過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠の可能性のある婦人				投与部位眼科用として角膜、結膜には使用しない。		1日1回患部に塗布する。	下肥の皮膚真菌菌症の治療・白癬・足白癬・手白癬、体部白癬、股部白癬・皮膚カンジダ症・指間びらん症、間擦疹(乳児寄生菌性紅斑を含む)、爪囲炎・皸風

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
抗 白 黴 菌 成 分	塩酸ネチコナゾール	・アトラント軟膏1% ・アトラント外用液1%	抗真菌作用 ・塩酸ネチコナゾールは、皮膚糸状菌をはじめ酵母状真菌、黴菌などに優れた抗真菌作用を示した。主な臨床分離株に対する最小発育阻止濃度(MIC)は次のとおりである。 作用機序 塩酸ネチコナゾールの作用機序は、完全発育阻止及び殺菌的作用を示す高濃度域では直接的細胞膜障害が、また部分的発育阻止を示す濃度域においては真菌細胞の構成成分であるエルゴステロールの合成阻害が主で、その作用による膜物質組成の変化が前者の作用を増強す				アトラント軟膏 0.1～5%未満(局所の刺激感、皮膚炎、発赤・紅斑、そう痒感、湿潤、落屑の増加等) 0.1%未満(亀裂、白癬疹) 頻度不明(自家感作性皮膚炎) アトラント外用液 0.1～5%未満(局所の刺激感、皮膚炎、発赤・紅斑、そう痒感等) 0.1%未満(亀裂) ((*軟膏と比較して刺激感が多い。))				本剤成分過敏既往歴、著しい皮膚面	亀裂、糜爛面(アトラント外用液)							1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 ・白癬、足白癬、体部白癬、股部白癬 ・皮膚カンジダ症、指間びらん症、間擦疹 ・黴風

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化							
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果			
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
抗 白 癬 菌 成 分	塩酸ブテナ フィン	メンタックス クリーム・ 液・スプレー	抗真菌作用 ・抗真菌活性 塩酸ブテナ フィンは皮膚 糸状菌 (Trichophyto n属、 Microsporium 属、 Epidermophyt on属)及び黴 風菌 (Malassezia furfur)に対し 強い抗菌力を 示し、その 作用は殺菌的 である。 作用機序 塩酸ブテナ フィンの作用 機序は、真菌 細胞膜の構 成成分である エルゴステ ロールの合成 阻害である が、その作用 部位はイミダ ゾール系薬剤 と異なりスク ワレンのエポ キシ化反応 阻害に基づい ている。			0.1～5%未 満 (局所の発 赤・紅斑、そ う痒、接触皮 膚炎、刺激 感、水疱) 0.1%未満 (皸爛、落 屑、発疹) クリーム剤 安全性評価 対象例9,517 例中、131例 (1.38%)206 件 主な副作用: 局所の発赤・ 紅斑54件 (0.57%)、接 触皮膚炎39 件(0.41%)、 そう痒39件 (0.41%)、刺 激感22件 (0.23%)等 液剤 安全性評価 対象例1,922 例中、16例 (0.83%)23 件 主な副作用: 局所の発赤・ 紅斑7件 (0.36%)、そ う痒6件 (0.31%)、刺 激感4件 (0.21%)等			本剤の成分過敏 症既往歴、著しい 癬癩面	・妊婦又は妊娠の 可能性のある婦人 ・低出生体重児又 は新生児 ・乳児又は3歳以下 の幼児 ・亀裂、皸爛面には 注意して使用する。 (液・スプレー剤)			投与部位 ・眼科用として角 膜、結膜に使用 しないこと。 ・著しい癬癩面 には使用しないこ と。 ・亀裂、皸爛面 には注意して使用 すること。(液・ス プレー剤) ・点鼻用として鼻 腔内に使用しな いこと。(スプ レー剤のみ) ・顔面、頸部等、 吸入する可能性 のある患部には 注意して使用する こと。(スプレー 剤のみ)		液・クリーム 1日1回患部に塗布する。 スプレー 1日1回患部に噴霧する。	下記の皮膚真菌 菌症の治療 ・白癬:足部白 癬、股部白癬、 体部白癬 ・黴風
	クロトリマ ゾール	タオンゲル クリーム・液	タオンは Candida属、 Trichophyton 属、 Microsporium 属等に対し強 い抗菌作用を 示す。			0.1～5%未 満 (局所の刺激 感、皮膚炎、 熱感、発赤・ 紅斑) 0.1%未満 (皸爛、丘疹)		本剤の成分過敏 症既往歴、著しい 癬癩面(ハクセリン より)	・妊婦又は妊娠の可 能性のある婦人			使用部位 眼科用として角 膜、結膜には使 用しない。 著しい癬癩面 には使用しない。 (ハクセリンより)		1日2～3回患部に塗布す る。	下記の皮膚真菌 菌症の治療 ・白癬:足部白 癬(汗疱状白 癬)、趾間白 癬)、頭癬、斑 状小水疱性白 癬 ・カンジダ症: 指間癬菌症、 間擦疹、乳児 寄生菌性紅 斑、皮膚カンジ ダ症、爪菌炎	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者質量(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	過敏反応	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	過敏反応	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
抗白癬菌成分	シクロピロキサオラミン ・ハトラフェンクリーム ・ハトラフェン液	抗菌作用 シクロピロキサオラミンは皮膚糸状菌及び酵母類に広く抗真菌作用を示し、その作用は殺菌的である。 ・多くのグラム陽性、陰性の細菌類にも抗菌作用を示す。 作用機序 真菌細胞の膜及び膜系に作用して、細胞の増殖・生存に必要な物質の輸送機能を阻害し真菌を死に至らしめるものと考えられている。MICレベルでは、外部基質(電解質、各種栄養分)の細胞内への取り込み及び細胞内高分子物質(タンパク、DNA、RNA)の合成を阻害し、菌の発育を阻止する。高濃度(殺菌濃度)では、更に膜透過性阻害を示し、また、K <sup>+</sup> 、アミノ酸等の菌体成分の漏出を亢進させ、菌を死滅させる。				クリーム 0.1~5%未満 (皮膚炎、皮膚刺激作用)  ハトラフェン液 ((*クリーム剤と同様の副作用報告))			本剤の成分過敏症既往歴、著しい痒癩面	・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人 ・低出生体重児又は新生児 ・乳児寄生菌性紅斑(アルコール性薬剤(エタノール等)の局所刺激作用) ・ハトラフェン液) ・亀裂・糜爛面(ハトラフェン液)				使用部位 ・眼科用として角膜、鞏膜には使用しない。 ・著しい腐爛面には使用しない。 ・亀裂・糜爛面には注意して使用する。		1日2~3回患部に塗布又は塗擦する。	・白癬:体部白癬、股部白癬、汗疱状白癬 ・カンジダ症:間擦疹、乳児寄生菌性紅斑、指間腐爛症		

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ			適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量以上 過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
硝酸エコナ ゾール	パラベール クリーム・液	抗菌活性 ・本剤の抗菌 スペクトルは 広く、皮膚系 状菌、 Candida albicans、その 他の Candida属菌 種、Candida 以外の酵母 及び酵母様 真菌、黒色糸 状菌、 Aspergillus属 菌種、 Penicillium属 菌種、放線 菌、グラム陽 性細菌に対し て強い抗菌活 性を示す(in vitro)。 作用機序 本剤の作用 機序は、細胞 膜に一次作 用点を有し、 物質輸送と透 過性障壁を 阻害し、高分 子物質合成 阻害と呼吸阻 害を二次的に 誘起させ、更 に高濃度では RNA分解を促 進し、細胞発 育阻止又は 細胞死に至ら しめる				0.1～5%未 満 (皮膚刺激症 状(発赤・紅 斑、刺激感、 そう痒、灼熱 感、疼痛 等)、皮膚 炎、びらん、 水疱、腫脹) 0.1%未満 膿疱、丘疹			本剤に過敏な患者 ・乳児寄生菌性紅 斑(アルコール性基 剤が局所刺激作 用)(液のみ) ・妊婦又は妊婦の 可能性のある婦人			・銀剤用として角 質、乾燥には使 用しない。 ・本剤の基剤の 油性成分は、 コンドーム等の 避妊用ラテックス ゴム製品の品質 を劣化・破損する 可能性があるた め、接触を避け させる(クリーム のみ)		通常1日2～3回患部に塗 布する。	下記の皮膚真菌 菌の治療 白癬・足部白 癬(汗疱状白 癬)、手部白癬 (汗疱状白 癬)、体部白癬 (斑状小水疱 性白癬、頑 癬)、股部白癬 (頑癬) カンジダ症：指 間びらん症、 間擦疹、乳児 寄生菌性紅 斑、爪囲炎、外 陰炎(ただし、 外陰炎はク リームのみ適 用) 癬風

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 添用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性			適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの			
抗 白 癬 菌 成 分	硝酸オキシコ ナゾール	オキナゾ ールクリーム 液	抗菌作用(in vitro) 硝酸オキシコ ナゾールは皮 膚糸状菌、酵 母状真菌、二 形性真菌(臨 床分離株)等 に対して広範 闊な抗菌スペ クトルを有し そのMICは10 μg/mL以下 であった。ま た、好気性、 通性嫌気性 のグラム陽性 球菌及び桿 菌に対しても 抗菌活性を 示すことが認 められた。 作用機序 硝酸オキシコ ナゾールの抗 真菌活性は 直接的細胞 膜障害作用 により発揮さ れる。また、 低濃度域で の部分的発 育阻止効果 には、エルゴ ステロール合 成阻害作用 が関与してい る。			0.1~5%未 満 (局所の発 赤、刺激感、 接触皮膚炎、 そう痒) 0.1%未満 (局所の腫 脹)  クリーム剤 総症例数 11,737例中 117例 (1.00%)196 件 主な副作用: 発赤61件 (0.52%)、刺 激感46件 (0.39%)、そ う痒の増強 40件 (0.34%)、接 触皮膚炎40 件(0.34%) 等 液剤 総症例数 2,228例中46 例(2.07%) 70件 副作用の内 訳:刺激感32 件(1.44%)、 発赤19件 (0.85%)、接 触皮膚炎11 件(0.49%)、 そう痒の増強 8件(0.36%)			本剤の成分過敏 症既往歴、着しい 陰嚢嚢			・乳児寄生菌性紅 斑(アルコール性基 剤が局所刺激作 用。液のみ) ・亀裂、びらん面 (刺激を生じること がある。液剤)			使用部位 ・眼科用として角 膜、結膜に使用 しないこと。 ・著しいびらん面 には使用しない こと。 ・液剤は、刺激を 生じることがある ので、亀裂、びら ん面には注意し て使用すること。 使用時 ・クリーム剤の基 剤の油脂性成分 は、コンドーム等 の避孕用ラテッ クスゴム製品の 品質を劣化・破 損する可能性が あるため、接触を 避けさせること。	1日2~3回患部に塗布す る。	下記の皮膚真 菌症の治療 白癬:足白癬、 手白癬、股部 白癬、体部白 癬 カンジダ症:間 擦疹、乳児寄 生菌性紅斑、 指間びらん 症、爪間炎、そ の他の皮膚カ ンジダ症 皸風

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用の おそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題 が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
抗 白 癬 薬 成 分	硝酸ミコ ゾール	・アムリード D軟膏 ・フロリードD クリーム ・フロリードD 液	抗菌作用(in vitro)→フロ リードD(ク リーム)より ・真菌に対する 作用 硝酸ミコ ゾールは白癬 の起因菌である 白癬菌属、 小胞子菌属、 表皮菌属やカ ンジダ症の起 因菌であるカ ンジダ菌をば じめ、アスペ ルギルス属、 クリプトコク ス・ネオフォ ルマンス等の 諸菌種に対 しても強い抗真 菌作用を有す る。 作用機序 硝酸ミコ ゾールの抗菌 作用、生化学 的作用及び 超微形態学 的作用を検討した結果、 硝酸ミコ ゾールは低濃 度では主として膜系(細胞 膜並びに細胞 壁)に作用 して、細胞の 膜透過性を 変化させること により抗菌 作用を示す。 また、高濃度 では細胞の 壊死性変化 をもたらし、殺 菌的に作用 する。				頻度不明 (発赤・紅斑、 そう痒感、接 触性皮膚炎、 びらん、刺激 感、小水疱、 乾燥・亀裂、 丘疹、落屑、 腫脹等) フロリードDク リーム 総症例 28,803例中 231例 (0.80%) 主として、発 赤・紅斑 (0.35%)、そ う痒感 (0.21%)、接 触性皮膚炎 (0.13%)、び らん (0.08%)、刺 激感 (0.07%)、小 水疱 (0.07%)等 の皮膚炎症 状であった。 0.1~5%未 満 (発赤・紅斑、 そう痒感、接 触性皮膚炎) 0.1%未満 (びらん、刺 激感、小水 疱、乾燥・亀 裂、丘疹、落 屑、腫脹等) フロリード液 総症例2,587 例中34例 (1.3%) 主として、そ う痒感 (0.4%)、発 赤・紅斑 (0.3%)、刺 激感 (0.2%)、落 屑(0.2%)、 乾燥・亀裂 (0.2%)、痒 痛(0.2%)等 の皮膚炎症 状であった。 0.1~5%未 満 (そう痒感、 発赤・紅斑、 刺激感、落 屑、乾燥・亀 裂、痒痛、小			本剤の成分過敏 症既往歴	・妊婦(3カ月以内) 又は妊娠の可能性 のある婦人 ・乳児寄生菌性紅 斑(アルコール性薬 剤(エタノール等) の局所刺激作用。 フロリードD液)			使用部位 眼科用として、角 膜、瞼には使 用しない。 その他 本剤の基剤であ る油性成分 は、コンドーム等 の避妊用ラテッ クスゴム製品の 品質を劣化・破 損する可能性が あるため、接触を 避けさせる。		1日2~3回患部に塗布す る	下記の皮膚真 菌症の治療 白癬:体部白 癬(斑状小水 疱性白癬、頑 癬)、股部白癬 (頑癬)、足部 白癬(汗疱状 白癬) カンジダ症:指 間びらん症、 間擦疹、乳児 寄生菌性紅 斑、爪囲炎、外 陰カンジダ 症 疥癬

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 差用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量以上 適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
抗白癬菌成分	テオコナゾール	医療用医薬品としてなし																
	トルナフター	ハイアラージン軟膏・液	各種真菌類に対するトルナフター抗真菌力  対象菌 MIC (μg/ml) Trichophyton rubrum 0.0125 T. interdigitale 0.025 T. asteroides 0.025 Microsporum roseum 0.0125 Microsporum japonicum 0.005 Epidermophyton inguinale 0.005 Candida albicans > 500 Cryptococcus neoformans > 500 Aspergillus fumigatus > 500 Aspergillus niger 0.0125				0.1%未満(局所刺激、発赤、皮膚炎等)	頻度不明(過敏症状)		本剤成分過敏症既往歴	・広範囲の病巣に使用する場合	・患部が化膿しているなど湿潤、びらんが著しい場合にはあらかじめ適切な処置を行った後使用する。	・長期間使用しても症状の改善が認められない場合は改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。	・眼科用には使用しない。			通常、1日2~3回、適量を患部に塗布又は塗擦する。	汗疱状白癬、頑癬、小水疱性斑状白癬、皰風



みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等); (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化							
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
ピホナゾール	・マイコスポールクリーム ・マイコスポール液	抗真菌作用 ・ピホナゾールは、皮膚糸状菌(Trichophyton属、Microsporum属、Epidermophyton属)、酵母類(Candida属)及び癬菌(Malassezia furfur)に優れた抗真菌作用を有する。作用機序 ピホナゾールは、真菌細胞に対して二元的な作用機序を有する。低濃度域では細胞膜の必須構成脂質成分であるエルゴステロールの合成を阻害し、高濃度域ではそれに加えて細胞膜のリン脂質と特異的に結合することにより膜の物性を変化させる。いずれの効果も最終的に細胞膜の構造・機能を障害し、その結果、抗真菌作用が発現される。		マイコスポールクリーム 主として接触皮膚炎(0.53%)、局所の刺激感(0.17%)、発赤・紅斑(0.21%)、そう痒(0.12%)等 0.1~5%未満 (局所の刺激感、皮膚炎、発赤・紅斑、そう痒) 0.1%未満 (びらん、鱗屑、亀裂) マイコスポール液 主として局所の刺激感(0.87%)、接触皮膚炎(0.47%)、発赤・紅斑(0.27%)、亀裂(0.23%)、鱗屑(0.13%)、そう痒(0.11%)等 0.1~5%未満 (局所の刺激感、皮膚炎、発赤・紅斑、亀裂、鱗屑、そう痒、びらん) 0.1%未満 (乾燥)			本剤の成分過敏 症既往歴、著しい びらん面	・妊婦(3か月以内) 又は妊娠の可能性のある婦人 ・亀裂、びらん面			・眼科用として角膜、結膜には使用しない。 ・著しいびらん面には使用しない。 ・亀裂、びらん面には注意して使用する。				1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 白癬:足部白癬、体部白癬、股部白癬 カンジダ症:指間癬、皮膚カンジダ症 癬症
ピロールニトリン	医療用医薬品としてなし															

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重要な副作用のおそれ		C' 重要ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(服用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重要な副作用のおそれ		重要ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(服用のおそれ)			スイッチ 化に伴う使 用環境の変 化		
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	適量使用・服用 のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェンヒドラミン	外用はなし ジフェンヒ ドラミンはあり ーレスタミン コーワ軟膏						頻度不明(過 敏症)					炎症症状が 強い渗出性 の皮膚炎。適 切な外用剤 の使用で軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用する。		使用部位: 眼の まわりに使用し ない。			通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	尋麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ
	マレイン酸ク ロルフェニラ ミン	外用の添付 文書なし																	
鎮痒成分	クロタミン	オイラックス	本剤は抗ヒスタ ミン作用を 示さないこと、 またヒトの皮 膚感覚のうち そう痒感を抑 制するが、他 の皮膚感覚 には影響を与 えないことな どから、抗ヒ スタミン剤、 局所麻酔剤と は作用機序 を異にすると 考えられる。 一般には、皮 膚に軽いしゅ く熱感を与 え、温覚に対 するこの刺激 が総合的に そう痒感を消 失させるとい われている。				0.1~5%未満 (熱感・しゃく 熱感・刺激症 状(ピリピリ 感、ひりひり 感等)、発 赤、発赤増 強・紅斑増 悪、分泌物増 加、浸潤傾 向)	5%以上(過敏 症)		本剤に対して過敏 症の既往歴	・高齢者・妊婦又は 妊娠の可能性のある 婦人への大量又は 長期にわたる広 範囲の使用、乳幼 児・小児に対する 広範囲の使用		炎症症状が 強い渗出性 の皮膚炎。適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用する。	・眼あるいは眼 周囲及び粘膜に は使用しない。 ・塗布直後、軽い 熱感を生じること があるが、通常 短時間のうちに 消失する。	・高齢者、妊婦 又は妊娠して いる可能性 のある婦人 には、大量・ 長期にわた る広範囲の 作用は避け る	通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布又は塗 擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠の 可能性のある婦人、大量 かつ広範囲の使用は避け る。	湿疹、尋麻疹、 神経皮膚炎、 皮膚そう痒症、 小児ストロフル ス		
収れん・保護成分	酸化亜鉛	酸化亜鉛	皮膚のたん 白質と結合 して被膜を形 成し、収れん、 消炎、保護並 びに緩和な防 腐作用を現 す。また、浸 出液の吸収 及び分泌抑 制により、創 面又は潰瘍 などを乾燥 させる。				5%以上また は頻度不明 (発疹、刺激 感等)	5%以上また は頻度不明 (過敏症状)		濃度または広範囲 の熱傷(組織修復 の遅延) 患部が湿潤してい る場所(組織修復 の遅延)				使用部位: 眼に は使用しない。 使用時: 顔って吸 入しないよう注 意させる。			・外用散剤(散布剤)として 15~100% ・軟膏剤・液剤(懸濁剤・リ ニメント剤・ローション剤 等)として2~80%  上記濃度に調製し、いず れも症状に応じ1日1~数 回患部に適用する。	軽度の皮膚病 変の収れん・ 消炎・保護・緩 和な防腐	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の 変化			
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ			薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ				適応対象の 症状の判別に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの										
局 所 麻 酔 成 分	塩酸ジブカイ ン 、 ヘ ル カ ミ ン 注 、 表 面 麻 酔 類 似 と 考 え 使 用	感覚・求心神 経繊維のNa+ チャネルを遮 断すること により局所麻酔 作用を奏現す る。効力、持 続性、毒性い ずれも最大級 の局所麻酔 薬であるが、 より効力を強 めるために局 所鎮痛以外の 目的にはエ ピネフリンを 添加して用い る		痙攣、痙攣等 の中毒症状 (頻度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眠 気、不安、興 奮、露視、眩 暈、悪心・嘔 吐等)	頻度不明(過 敏症)		本剤に対し過敏症 の既往歴	本人又は両親、兄 弟に気管支喘息、 発疹、尋麻疹等 のアレルギー反応を 起こしやすい体質。 高齢者、妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人。				使用に際し、目的濃度の 水性注射液または水性液 として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 仙膏麻酔 0.05～0.1%注射液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人10～30mg を使用する。 伝達麻酔 (基準最高用量：1回 40mg) 0.05～0.1%注射液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人3～40mgを 使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量：1回 40mg) 0.05～0.1%注射液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人1～40mgを 使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜 麻酔には、1～2%液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、噴霧または塗布 する。 ・眼科領域の麻酔には、 0.05～0.1%液にエピネフ リンを添加したものを用い、 通常成人には1～5滴を点 眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、 0.1%液にエピネフリンを添 加したものを、塩酸ジ ブカインとして、通常成人 男子10～20mg、女子3～ 7mgを使用する。 ・膀胱粘膜麻酔には、 0.025～0.05%液にエピネ フリンを添加したものを 用い、塩酸ジブカインと して、通常成人10～20mg を使用する。 ・局所鎮痛には、0.025～ 0.05%液を用い、適量を 使用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエピネフ リンを添加したものを 用い、伝達麻酔・浸潤麻酔 には塩酸ジブカインと して、通常成人1～2mg を使用する。	仙膏麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔・浸潤麻 酔		



みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化			
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
殺菌・ 消毒成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として5%ヒビテン液	抗菌作用 (in vitro試験) : 広範囲の微生物に作用し、グラム陰性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。 ・グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。 ・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。 ・結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。 ・真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。 ・ウイルスに対する効力は確定していない。 作用機序 作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	ショック(0.1%未満)	0.1%未満(過敏症)			・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、脊髄、耳(内耳、中耳、外耳)(聴神経及び中枢神経に対して直接使用した場合は、弱聴、神経障害を来すことがある。) ・脾、胸腺、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている。) ・産婦人科用(膣・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)には使用しない。 ・眼	・薬物過敏症の既往歴 ・喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴			・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用すること。 ・眼に入らないように注意する。				本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) ③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液) ④医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上)) ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液)	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 差用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
殺菌・消毒成分	塩化ベンザルコニウム 0.1w/v%デブミトール水	・本剤は使用濃度において、栄養型細菌(グラム陽性菌、グラム陰性菌)、真菌等には有効であるが、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。イオン界面活性剤であるので、表面張力を低下させ、清浄作用、乳化作用等を示す。 ・作用機序は、陰電荷を帯びる細菌に陽電荷を帯びる塩化ベンザルコニウムが菌体表面に吸着・集積され、菌体たん白を変性させ殺菌作用をあらわす。					頻度不明(過敏症)		粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと				・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する(刺激性がある)。 ・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。 ・深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、調製後減菌処理すること。 ・経口投与しないこと。流膿には使用しないこと。 ・密封包装、ギブス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。	・粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと(全身吸収による筋脱力等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。		効能・効果:用法・用量(塩化ベンザルコニウム濃度) ①手指・皮膚の消毒:通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とし、その後、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で拭拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする。 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒:手術前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。 ③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。 ④感染皮膚面の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01%溶液を用いる。 ⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際は、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸する。 ⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を布片で塗布・拭拭するか、または噴霧する。 ⑦腫瘍の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。 ⑧結核菌の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。  ・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい		

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					従用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	用法用量	効能効果
殺菌・消臭成分	フェノール	フェノール	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効である が、芽胞 (炭疽菌、破 傷風菌等)及 び大部分の ウイルスに対 する効果は期 待できない。					頻度不明(過 敏症)		・損傷皮膚及び粘 膜(吸収され中毒 症状発現)				・原液または濃 厚液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・服に入らないよ うに注意するこ と。 ・本剤は必ず希 釈し、濃度に注 意して使用する こと。 ・炎症または易 刺激性の部位に 使用する場合には、濃度に注意 して正常の部位 に使用するよりも 低濃度とすること が望ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、ギブ ス包帯、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそ れがあるので、 使用しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。「吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。」 ・誤飲を避けるた め、保管及び取 扱いには十分注 意すること。		効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上			適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ
角質溶解成分	サリチル酸	サリチル酸	角質溶解作用:細胞間基質を溶解し、鱗屑の剝離を促進して角質増殖皮膚を軟化させる作用がある。 防腐作用:微生物(白せん菌類など)に対して抗菌性があり、その防腐力、石炭酸に匹敵する。													1. 通常サリチル酸として、5~10%の絆創膏を用い、2~5日目ごとに取りかえる。 2. 次の濃度の軟膏剤又は液剤とし、1日1~2回塗布または敷布する。小児:サリチル酸として0.1~3%、成人:サリチル酸として2~10%	1. 痲疹・鶏眼・胼胝腫の角質剝離。 2. 乾癬、白癬(頭部浸在性白癬、小水疱性斑状白癬、汗疱状白癬、頑癬)、皸風、紅色靴癬、紅色陰癬、角化症(尋常性魚鱗癬、先天性魚鱗癬、毛孔性苔癬、先天性手足皸癬、角化症(腫)、ダリエー病、遠山環状靴癬)、湿疹(角化を伴う)、口囲皮膚炎、掌跖膿疱、へブラ靴癬、アトピー性皮膚炎、さ癬、せつ、腋臭症、多汗症、その他角化性の皮膚疾患	
消炎成分	グリチルレチン酸	デルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造が、ハイドロコチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。					5%以上又は頻度不明(過敏症)									通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎